

淨土經典の中國化の性格

——大阿彌陀經を中心として——

朝 山 幸 彦

漢訳淨土經典の一部分の中國選述説や訳文の言句の中國文獻からの引用の事実から、淨土經典の中國化は、ほぼまちがない。その漢訳淨土經典の中、大阿彌陀經を特に中心にとり上げるのは、原始淨土思想を究明するための重要な一資料と目されている外に、特異な性格をもつと考えられるからである。大阿彌陀經が、支謙訳經群の中では現存梵藏と全かけ離れている点と、五存の無量壽經群の中では、平等覺經や魏訳大無量壽經に比べても、道德性を強く帯びていることは指摘済みである。更に大阿彌陀經は、支謙訳の阿彌陀仏淨土言及經典七訳の中で、(1)すべてが阿惟越致をいい、無生法忍があるのに、大阿彌陀經だけには無生法忍がなく、(2)すべてが無上正等覺をいうのに、大阿彌陀經だけには無上のない三耶三仏檀となっている。この特異性の理由が、支謙の訳經の仕方の特色、変容の傾向の中に見い出されるようである。支謙は二十二經漢訳したとされるが、今回は「大明度經と

Aśtaśaḥsrikaprajñāpāramitā」「維摩詰經と準原典藏訳や羅什訳、玄奘訳」「大阿彌陀經と Sukhāvatīyūha」の比較や他の支謙訳の資料から、訳文の変容の傾向を指摘し、その性格を考察してみようとするものである。支謙訳の原本変容の性格は、その後の中國淨土經典に影響を及ぼしていると考えられるので、そのまま淨土經典の中國化の性格を示しているものとも言えよう。その性格を便宜上、四項目にまとめる。

(一) 階層的、構造的な変容の傾向。(イ)大明度經(大正八・四九四下)「仏は言う。(イ)逮得禪者の如く不動不揺なり。(ロ)応饑地の如く、(ハ)縁一覺地の如く、(ニ)仏地の如く、(ホ)本無の如く終に不動なり。(1)仏は本無を説く。聞者よ、(2)非虚空にして、(3)本無は不言なり、(4)本無は是れ所有なり、(5)本無の本の如し、亦(5)、非と言わず。(イ)聞己した如く、(ト)若し余処に於て転じて、(イ)聞き終り、(ロ)疑わず……」に対応する原文は、A. P. (Vaidya 本 p. 161～) bhagavān āha yā ca subhūte

prthagiana-bhūmih, yā ca śrāvakahūmih, yā ca pratye-
kabuddhabhūmih, yā ca buddhabhūmih iyañ tathatābhū-
mir ity ucyate | sarvāis caitās tathatāyā advayā advaidhī-
kāra avikalpā nirvikalpā iti tāñ tathatāñ tāñ dharmatām
avatarañti | tathatāyāñ sthitas tathatāñ na kalpayati na
vikalpayati, evaṃ avatarati | evaṃ avatirgo yathā tathatāñ
śrutvāpi, tato'pi cāpakramya na kankṣati na vimatiñ
karoti, na vicikitsati……とある。梵漢の各傍線部分は対応
する。前半の(イ)～(ニ)までは梵漢一致するも、(ハ)の本無の部分
はA. P.になく、後半(ウ)～(リ)も梵漢一致する。中間部(1)～(6)
は、梵漢一致せず、漢訳は本無の内容説明をしており、A. P.
は空の内容を具体化している。支謙はA. P.の中間部を改変
して、本無の実体性を割りこませたと考えられる。A. P.が
凡夫地は真相であり、声聞地も真相である等として、階層性
の枠をはずし、空的考え方を意味するのに、支謙訳は各地を
不動(不揺)として固定的に読め、かつ仏地より上に「莊子」
至楽篇からの本無を最上位にしている。これは序列化と固定
化への改変であり、仏教の仏地より中国の本無を最上位に加
えている。この本無は後に般若空三義の中の本無の原初であ
るかも知れない。(ロ)大阿弥陀經(大正二二)の三〇四下～三〇五
上とS. V.二〇章とはだいたい対応する。S. V.では「天
と人との区別はない」という趣旨で空的である。それ故浄土

浄土經典の中國化の性格(朝山)

人と他化自在天とは同じという。漢訳は「世俗で王と乞食に
面目の醜の差があるのをはじめ、浄土人と天とも差があ
る」という。面目を規準にしたのは、既述したように、願文
に「漢書」谷永杜鄭伝から五事を取り入れ、その貌が魏訳の
讚仏偈の中で梵文を顔(光顔、容顔)と改変し、強調してい
る。漢訳では、乞食(王) <遮迦越王> 第二天王 <第六天王
> 阿弥陀仏国辺住者 <浄土人の順で段階的に面目が勝れてい
るとし、第六天は他化自在天であるから、漢訳では浄土人の
面目はS. V.のより二位も上位にしたことになる。その上浄
土人と浄土辺住人とは差別されている。いずれにしても、上
下に序列的に改変され、かつ中心と辺地の差別意識が反映し
ている。それが遮迦越王の越に表わされ、十三他方仏国の蔡
の六他方仏土名に採用されている。これらは中国の歴史上
の中央でなく辺地の国名からきている。中心地はどこか。
(イ)大阿弥陀經の空や無的境位を表わす中国的表現には、階層
的構造的傾向が伺われる。空的な内容を表わす無所適莫は常
に二次的である。三例あるが、出典箇所のみ示すと、(1)三〇
二中(成仏時でなく、法蔵菩薩時)。(2)三一〇上(上輩でなく中
輩者)。(3)三一一下(浄土内での求道時)とある。この無所適莫
は「論語」里仁の典故であることは既述した。境位を示す第
一義的な中国的表現は、大阿弥陀經の場合「自然無為、虚無
空立、恢安、無欲」の無的言句等であり、その典故は「莊

子」刻意篇であることは既述した。無所適莫は支謙訳の維摩詰經、大明度經、太子瑞應經にも用いられている。自然無為等の言句は維摩詰經、大明度經、本業經にも共通にある。そして空のより上に、無的境位が配置されているのも構造的であろう。これは前述の本無最上位と同一思考だ。(二)維摩詰經が固定的、二項構造的傾向があることは、(trina-par) mī-riṅgを以淨觀垢へと改変したり、上知<下愚の固定化への変容の中に見られる（印仏研、34号の2拙稿参照）。

(三) 中国的道德性の補完。(イ)大阿弥陀經が宗教性とは別に道德的傾向が強く、道德的意図をもち、それが五悪段に連なることは既述したが、「論語」との結びつきも一部見られた（印度哲学仏教学一号参照）。(ロ)同、王の善因（三〇四下）は梵藏の支持ないが、「漢書」谷永伝の王者の善行と一致することとは既述した。乞食の因は仏教的である。(ハ)同「仏の行処せる郡国……（市里）は孝、忠、礼等が行われる（趣意）」は二例（三一六中、三一六上）あるが、道德は大部分が中国の徳目であり、発想のパターンも天人相与説に似ている。その上用語も、秦代の郡県制でなく、漢代以降とされる郡国里制が反映している場合もある。以上支謙訳の經典群の中で、部分的に道德化の改変の場合もあるが、大阿弥陀經ほど全体的に道德性の強い經は見られないし、内容が二重構造を示すのも注目される。

(四) 王制への配慮と阿弥陀仏との関係。(イ)大阿弥陀仏との関係。大阿弥陀經では、王が乞食より勝れているとしていることは前述したが、「帝王人中独尊……尊貴独王」（三〇四下）ともされている。亦、阿闍世王太子は作仏可（三〇三中）として善王系統の伝記を採用しているが、いずれもS.V.とはかけ離れている。総じて大阿弥陀經は王に尊崇的であるとまとめうる。しかし大師阿弥陀仏と二例（三〇九上）あり、もし大師が三公の一のそれを読めたとすると、仏と王との関係を示す例証となろう。読み方によつては体制内の仏に解しうるのでないか。(ロ)平等覺經の讚仏偈（大正二、二八〇中）では「王中の王（なるみ仏）が（narendrarāja）一切諸方を照らし給うように」（S.V.）を「処々人民見一切皆歡喜」と訳し、「一切の生ける者どもの救い主である仏に（Duddha……sarvasatvārājā）、我がなれるように」（S.V.）を「一切諸恐懼、我為獲大安」と訳し、仏が最高の救済王であることを表わさない。(ハ)魏訳大無量壽經の重誓偈（大正二、二六九中）では「(1) 我は……最高の生ける者（satvāśāto）とはなりませんように(2) 我は人々の中の寶石の如き王（ratano narāna rāja）とはなりませんように(3) 我は力ある世の主（balaprapūṭṭu lokanātha）とはなりませんように(4) 誓不成正覺」と訳し、仏が最高の世の王であることをさげるととれる。以上は現世の王に対する配慮からであろうか。重誓偈の第7、

10、11頌でも同様の例があり、現王と抵触しないよう配慮がなされていると思われる。以上仏を最高者と表現することを避け、王は独尊とするところでは、大阿弥陀経だけが、無上正等覚(仏)とせず、三耶三仏檀にとどめた考え方と一致し、かつ大明度経で仏地より根本に本無を配置したのと同類の態度でないだろうか。(三)この王体制への配慮は統治的発想へと連なるであろう。大阿弥陀経(三一四上)では「主上不明心…任用臣下…為其所調、妄損忠良賢善」というが、

S. V. にはない。同趣旨は尚書、礼記にもあるが、支謙とほぼ同時代の諸葛亮が「親小人、遠賢臣、此後漢所以傾頹也」と後漢の現実と結びついて発言している。(四)大阿弥陀経の五悪段に悪因苦果の報いの外に、王・官の刑法牢獄の得禍が第一、二、三悪段にいわれ二重性を示しているが、維摩詰経(五三二下)では「此土菩薩於五罰世、以大悲、利人民」とあり、五罰の世というのは他三訳にない。五罰は尚書の呂刑にも出る。この王体制への配慮と秩序維持的発想は、後の「沙門王者不敬論」の問題と関わってゆくと考えられる。更に、上からの道徳であることは「君率化、為善、教令臣下」(三一六上)とか「臣欺其君」(三一四上)は悪という等の言句が諸所に伺われるし、五悪段で田畑六畜の次に奴婢の有、非所有が、問題とされるが、戦力、物としての奴婢が教化対象から除かれていると想定されるのではないか。更に

支謙伝(大正五五、九七下)の「吳主孫權…甚加寵秩」という事実と大阿弥陀経の王体制内の発想の傾向とは結びつくともありうる。以上がもし首肯されるとすれば、大阿弥陀経は中国の歴史的、実情に制約された性格をもつと見なす必要がある。

阿 淨土(or泥洹)の存在と空思想との関係を、どう把握したかについては、有性をいう。(一)大明度経(四八〇下)「吾当滅度、無央数人、已度、無量无数人民、皆得泥洹。知其無法、得滅度也。」に対応する原文は A. P. (p. 11) *asankh-yeyā mayā sattvān parinirvāpāyāyā itī | na ca te santi yeyā parinirvāpāyāyā itī | sa tāns tāvatāṅ sattvān parinirvāpāyā itī | na ca sa kasācī sattvo yaṅ parinirvāyā ca parinirvāpāyāyā itī | tat kasya heto? とある。傍線のない部分が両者一致する。漢訳の傍線部分は A. P. の傍線部分に一応対応するが、A. P. の趣意は「涅槃人は実在しない」というが、漢訳ではその意味は訳出されていない。涅槃に関するこの例は大明度経に繰返し出てくるが、大明度経は涅槃(人がない)というのを省略した可能性がある。(二)維摩詰経(五三〇上中)「修治仏土、淨訓化諸群生、由是得最利、無人々所行」と訳するが、梵文がないので、羅什訳、玄奘訳、藏訳の共通な内容を考慮してみると、三訳ともに「仏土は空、有情も空」をいう。それ故原文は三訳共通に類するとす*

ると、支謙訳のみ「仏土の空をいわず、有性が前提」になっている。とすれば、支謙は、空を有に改変したのではないかと想定できる。因みに準原典の藏訳では *nam-mkhab-kha-bur zin nams gyur, sems-can sems-can hdu-ses med*. 「しかし（実際には）国土も虚空のようなもの（と知り）、衆生も（実在する）衆生として考えることがない―長尾雅人博士訳より）」と仏土、人の実在をいわない。(イ)大阿弥陀経では「浄土は泥洹に次ぎ、自然七宝」ともするけれど、他方では「説…快善。如…仏所言…無…有…異…」（三二七上）という。もし無有一異が、空の意味でなく、前後文の関連から「（自然七宝と）一つの異もあるなし」と読むのだとすると、支謙はやはり浄土の実在を自明のことと漢訳していることになる。(ニ)平等覚経及び魏訳の讚仏偈では、前後の頌が一致するのに、第八頌の浄土の空性をいう部分のみ一致しない。平等覚経（二八〇下）「令…我為…世雄…国土最第一…其衆殊妙好…道場踰…諸利…国如…泥洹界…而…無…有…等…雙…我当…常愍…哀…度…脱…一切人…」とあり、それを踏襲して魏訳は「令…我作…仏国土第一…其衆奇妙超絶…国如…泥洹…而…無…等…雙…我当…哀愍…度…脱…一切…」となすが、S. V. (Ashkaga 本 p. 8, Nanjo, Max Müller 本 p. 8—9) の *ksetra mama udāra agrasreṣṭho | varāṃ ihā mahi saṃskṛtesmin | asadṛṣa nirvānalokadhātus-aukhyān | taśca asatvatayā viśodhayaṣṭe || 8 ||* とあり、

tas を仏土とすると、仏土の空性を意味することになる。藏訳でも下線部分は *de yan ma mohis-pa* (河口慧海、浄土宗全書三三—三三二頁) とあり、やはり仏土の空性の意味に訳している。中村元博士も同じ解釈をしておられる。この両漢訳の浄土観は大阿弥陀経の有性をひき継ぐものであろう。そして大阿弥陀経では浄土の空や王制と抵触する讚仏偈や無の最上でなく空の最高知をいう往勸偈を略した可能性も考えられる。大阿弥陀経は浄土全体の空性をいうかわりに、浄土の部分の空をいう。即ち浄土人の身体、華、乱風、飲食、華香自然之物は非世間非天上的であるという。この存在の弁証法は空性を表わす。無所適莫も空性を表わす実践の弁証法であるが、空的な無生法忍の代替とも目されたので、大阿弥陀経にだけ無生法忍がないのであろう。そして大阿弥陀経等の浄土の実在性の理解は、後の指方立相観の基礎となったのであるか。亦、空を「ない」とのみ一義的にとらえると、心経で「色空」を「度…一切苦厄」の現世利益的文言にかえ、維摩詰経も同じ利益的改変がある（印仏研24の2、拙稿参照）。大阿弥陀経も疾病が癒え、罪過も救われるという実際的なものであった。浄土經典も、原初から空思想と深く関わる。

〈キーワード〉空、浄土、支謙

(北海道教育大学教授)